

CONTENTS

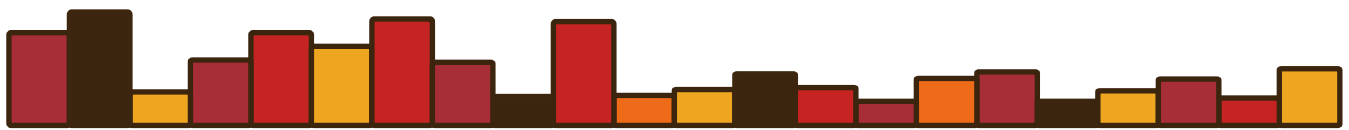
留学生会から新入生のみなさんへ	2
留学生の四季	3
派遣留学体験記	4
九州産業大学派遣留学案内	6
国際交流ふれあいフェスタ2008	7
日本語弁論大会	8
受入れ留学生体験記	10
平成20年度国際交流の歩み	12

JUNCTION



▶ 留学生会から新入生のみなさんへ

Greetings from International Student's Union



平成 20 年度九州産業大学留学生会会長

チョウ トウ

張 董 (中国)

新入生の皆さん、ご入学誠におめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

私は、平成 20 年度九州産業大学留学生会会長の張董と申します。私が大学に入学した時は、日本での生活や学修について何も分からないことばかりでしたが、先輩からいろいろなことを教えていただいたお陰で、とても助かりました。そして、私は、四年生になって、少しでも九州産業大学の留学生たちの力になりたいと思い、留学生会の会長になりました。

故郷を離れて、異国で生活をするは大変なことです。家族と会えず寂しい日もあるかもしれません。しかし、私は、大学に入ってから寂しいと感じたことはありませんでした。なぜなら、この留学生会は私にとって家族のようなものだからです。留学生会の活動を通して、多くの留学生と親しくなり、さまざまな国の留学生と友達になることができました。国によって文化、習慣、考え方など違いますが、みんな留学生会の家族であり、お互いに理解しあい、助け合い、楽しい大学生活を送ることができました。授業の内容が分からない時、生活に困った時、落ち込んだ時は、恥ずかしがらずに積極的に先生や友達に相談してください。何らかのアドバイスを受けることができ、どんな困難があっても乗り越えることができると思います。

留学生の皆さんが、充実した有意義な大学生活を送ることができるよう、心より願っております。



右端が張 董 留学生会会長

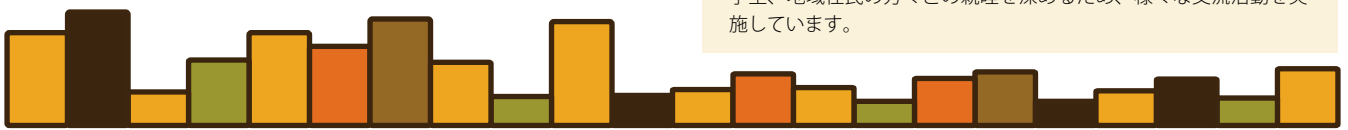


留学生ボーリング大会にて



▶ 留学生の四季

Quarterly Journal of International Students



本学では、13カ国415人（平成20年5月1日現在）の留学生
が、遠く故郷を離れ、それぞれの目標に向かって勉学に励んでいます。
また、本学では、留学生会が組織されており、留学生同士、日本人
学生、地域住民の方々との親睦を深めるため、様々な交流活動を実施
しています。



新入留学生オリエンテーション
学部 平成20年4月2日（水）
大学院 平成20年4月5日（土）



中国・四川大地震に伴う募金活動
平成20年5月19日（月）～5月30日（金）



留学生会定例総会
平成20年4月16日（水）



日本語弁論大会
平成20年10月18日（土）



新入留学生懇談会
平成20年5月15日（木）



香椎祭
平成20年10月31日（金）～11月4日（火）



新入留学生歓迎バスハイク
（スペースワールド・いのちのたび博物館）
平成20年5月18日（日）



外国人留学生送別会
平成21年3月13日（金）

▶ 派遣留学体験記

Outbound Exchange Program

本学の派遣留学では、留学生活を通してグローバルな視野と感性、知識を育成することを目的として、5カ国8大学の交流協定校に学生を派遣しています。

「出会い」から得られた貴重な経験

田中 弘喜

経営学部国際経営学科

派遣先：リバプール・ジョン
・モーズ大学（イギリス）

派遣期間：平成20年8月
～平成21年1月



旅先でフラットメイトと

私は、長いようで短いリバプールでの留学生活で、様々な国の学生とフラットを共にし、異なる文化や考え方に触れ、いろんなことを学びました。もし、留学という選択をしなかったら、彼らとは出会っていないでしょう。様々な人と出会い、多くの友人という財産を得ることができたことは、一番の留学のポイントだと思います。リバプールで築いた人間関係や経験から学ぶことが多く、私自身、成長できたのではないかと確信しています。

今まで私は、政治に興味がなく、世界情勢についても違う世界での出来事のような感覚でしかなく、まったく関心がありませんでした。しかし海外の学生は、政治や世界情勢にとっても関心が強く、それらについて話題にすることが多く、私も次第に影響を受けていきました。

友人のひとり、アフリカの貧困格差の原因、ボランティアに関する問題や政治の組織形成の現状や先進国からの影響について語り、生まれた地であるアフリカがよくなるために重要な政治を学んでいると言っていました。先進国に住む私たち自身、世界情勢に興味を持ち、学び、同じ課題をみんなで考えることが必要であるということも教えられました。

アフリカの人々の力になるために学ぶ、その友人の姿勢がアグレッシブであり、人を惹きつける魅力になるのだと思い、私もそんなビジョンをもった人間になりたいと思いました。また、自分の好きな経営学という分野で人のためになることをしたい、困っている人を助けられる人間になりたい、最終

的には何か日本や世界の役に立つ人間になりたいと思うようになり、自国である日本の政治にも積極的に関心を持ち、学んでいくべきだと考えています。

大学の授業で驚いたことは、すべての学生が積極的に講義に参加し、学生と教授の質疑応答のキャッチボールが活発に行われていることでした。

私は経営学の講義を受講していましたが、講義内容が難しく、日本人は私一人で、自分の意見を発言する機会が多く、高い英語力が必要になってくることから、様々な壁や問題にぶつかりました。しかし、クラスメイトのアドバイスやいろいろなサポートのおかげで、大きな問題や壁を克服し、成長することができました。日本に戻ってから今以上に積極的に講義に参加して、わからないことや疑問点があれば、自信を持って質問し、教授とのキャッチボールをしていきたいと思っています。

イギリスは当然のこと、ノルウェーやデンマーク、ベネズエラ、南アフリカ、バスクカントリーというスペインの自治州などの友人と、互いの文化や政治、経済情勢などについて会話することで、他の文化を知り、日本の文化の良さや悪い部分も知ることができました。

私は“他の文化を知ること、自国の文化を知ること”であると 생각합니다。

英語というコミュニケーションツールは、異国で育った人と人をつなぎ、会話を通じて、文化を学ぶだけでなく、様々なことを学べ、世界の人をひとつにします。使う人間によって無限の可能性を秘めたものであると改めて実感し、もっと学ぶことで英語を使いこなせるようになることで私自身の可能性を最大限に広げることができると思いました。

“人は出会いにより、人生に大きな影響を与え、人は出会いにより、成長する。また、人は出会いにより、人生を不幸にも幸せにもすることができる。それなら私は、人の出会いによって、幸せになりたい。また、人が私に出会うことで、人生が幸せになるように影響を与え、成長させる人間でありたい。”と 思います。



「学ぶことへの満足感！！」

川内 美咲さん

国際文化学部国際文化学科

派遣先：中国人民大学（中国）

派遣期間：平成20年8月

～平成21年1月



国際文化祭で日本文化を紹介
(下段左から2人目が本人)

私の留学生活、それは出会いと驚きの連続でした。人との出会いはもちろんですが、自分の知らない中国や中国語が好きな自分との出会い、さらに自分の想像を超えた中国とさまざまな出会いがありました。

中国人民大学での授業が始まる前まで、私は本科生（正規学生）に混じって授業を受けるとしていました。九州産業大学では、中国人留学生が私たちと同じ授業を受けているからです。しかし、実際には留学生だけで構成されたクラスで授業を受けることになり、最初は少し残念な気持ちになりました。でも後から、それでよかったのだと気づきました。経済学部の本科生の授業を聴講したことがあるのですが、先生の使う単語や授業の内容がとても難しく、ほとんど理解することができませんでした。自分の能力を少し過信しすぎたのだと気づかされました。

私は、幼い頃中国で育ちましたが、これまでの生活の中で中国語を話すことはあまりありませんでした。私の周りには親戚兄弟以外に私と同じような境遇の人がいなかったため、自分の中国語のレベルを比べる相手がいませんでした。中国人民大学には、私と同じような人が多く、日本で頑張っている彼らの姿をみて、勇気をもらい、たくさんの刺激を受けました。一緒にHSK《中国漢語水平考試（高等）》を受験した結果、良い成績を残すことができました。今回の留学を通して、自分の実力を見極める良い機会でもありました。

中国人民大学では語言生*として在籍していました。そこにはさまざまな国から来た留学生がたくさんいました。中国語のレベルがすごく高い学生もいれば、習い始めたばかりの学生もいました。HSKの受験を最重要視している学生もいれば、そうでない学生もいました。日本にいた時と比べると多

国籍の学生と一緒に過ごす中で、自分の知らない他国の事情や大衆文化、慣用語の使い方の違いなど語学以外の勉強もたくさんできました。

私が在籍していた高級クラスは、学生の語学レベルが高く、日常会話に支障がない程だったので、授業では積極的に発言をしていました。一番驚いたのは、精読の授業と口語の授業です。精読の授業では、先生が教科書の文章をいくつか分けて、何人かの学生にその部分を担当させます。その段落の文章の意味や文法を予習して授業で学生が教壇に立ち、授業をするというスタイルでした。先生はその補足説明をし、調べて分からなかったところを詳しく説明してくれました。

口語の授業では、まず授業開始30～50分間、新聞やニュースで気になったことを学生に発表させる「新聞我来讲」という授業がありました。テレビの政治問題でも身近に起こったちょっとした出来事を中国語でみんなに説明して聞かせるものでした。その説明の中に出てきた皆の知らない新しい単語を先生が黒板に書き出し、最後にその単語を使って新しい文章を作り発表します。準備に時間はかかりましたが、初めての授業スタイルで毎回楽しく参加していました。

私は、幼少期を過ごした昔のイメージのまま中国に到着したので、初めて中国で生活する友人に比べると、予想以上にカルチャーショックを受けました。中国は私たちが思っている以上のスピードで発展してきています。半年という短い期間でしたが、私は自分が期待していた以上にたくさん学ぶことができ、ますます中国語を勉強したいという気持ちが強くなっていきました。今回の留学を通して、今まで話さずにいた中国語ときちんと向き合い、さらに好きになることができました。これからはこの半年の経験を無駄にすることなく、自分の将来の夢を見つけて、しっかりと努力していきたいです。

*語言生：中国人民大学文学院に在学する留学生

九州産業大学派遣留学案内

Guide of Studying Abroad

募集開始は12月中旬の予定です。派遣留学先大学の修学費、奨学金など詳細については、国際交流センターへお問い合わせください。

留学相談窓口：中央会館2階 国際交流センター

交換留学

対象学部：国際文化学部、経済学部、商学部第一部・第二部、経営学部
留学期間：8月～翌年1月

アメリカ

●アビリン・クリスチャン大学

選考試験：書類審査

TOEFL ITP

面接（英語・日本語）

中国

●中国人民大

選考試験：書類審査

語学能力試験（中国語）

面接（中国語・日本語）

イギリス

●リバプール・ジョン・モーズ大学

●リーズ・メトロポリタン大学

選考試験：書類審査

TOEFL ITP

面接（英語・日本語）

韓国

●東亜大学校

●東国大学校

選考試験：書類審査

語学能力試験（韓国語）

面接（韓国語・日本語）

フランス

●リール・カトリック大学

選考試験：書類審査

語学能力試験（フランス語）

面接（フランス語・日本語）

芸術学部留学

交換留学のほか、芸術学部の学生をドイツとフランスの大学等へ、芸術文化交流を目的として派遣しています。

ドイツ

●シュトゥットガルト造形美術大学

留学期間：10月から4カ月

選考試験：書類審査

語学能力試験

面接

フランス

●ボルドー美術学校（隔年実施）

留学期間：10月から3カ月

選考試験：書類審査

語学能力試験

面接

スケジュール

- 9月
- 10月
- 11月
- 12月 派遣留学募集説明会
- 1月
- 2月 派遣留学生第一次選考試験（筆記試験）
- 3月 派遣留学生第二次選考試験（面接）
- 4月 派遣留学生決定
- 5月 派遣留学手続き
事前研修（5月中旬～7月中旬 全18回）
- 6月 ビザ手続き
- 7月 出発前オリエンテーション
- 8月 出発
- 9月
- 10月
- 11月
- 12月
- 1月 帰国
- 2月 事後研修
- 3月
- 4月
- 5月 派遣留学報告会



平成20年度派遣留学生 田島紫苑さん撮影
ニューメキシコ州 ホワイトサンズ“白い砂漠”にて

▶ 国際交流ふれあいフェスタ2008

International Exchange Festival
「World Dumpling Cooking」



国際交流センターでは、留学生と日本人学生、地域住民の方々との相互理解を深めるため、国際交流ふれあいフェスタを開催しています。昨年度は、3回にわたって開催し、異文化交流や意見交換が積極的に行われました。今回は、手作り餃子体験会の様子を紹介합니다。

「餃子」がつなぐ世界の食文化～手作り餃子体験会～

「THE 餃子」

〔平成20年12月13日（土）開催〕

日本で餃子といえば、ラーメンを注文するときのサイドメニューであったり、スーパーやコンビニに並ぶ食材として、様々な年代から親しまれ、もはや日本人の食生活を彩る代表的な料理のひとつです。

小麦粉で作った皮で具を包むという発想の料理は世界中にあります。その中でも中国の餃子は、もっとも歴史の古いもののひとつであり、アジアを中心に世界中に伝わっていき、地域ごとに姿、形を変えながら、それぞれの食文化の中に浸透していきました。

国際交流センターと留学生は、この「餃子」のグローバルさに注目し、さまざまな「餃子」料理のレシピを他国の留学生、日本人学生、地域の方々に紹介し、共に作ることを思いました。留学生にとっても他国の「餃子」料理は珍しく、日本人学生等と一緒に作ることができるとあって、張り切ってこの行事に取り組みました。また、この企画には、日本人学生だけでなく、学外の方々からも注目していただき、新聞やラジオで取り上げられる等、予想以上の反響を呼び、留学生、日本人学生、学外の方々等、約100人が参加しました。

留学生会役員による司会進行のもと、まず、「餃子」の起源と各国の「餃子」料理が紹介されました。今回紹介された「餃子」料理は中国、韓国、ネパール、スリランカの計4カ国4種類です。

中国は、日本でも馴染みの「水餃子」です。世界の「餃子」料理の起源のひとつといえるものです。韓国の「マンドゥ」は、中国から饅頭（マンドゥ）と餃子が伝わった際に同じ名前と呼ばれ、現在では餃子のみを表現する言葉になったそうです。今回は「マンドゥグック」という餃子入りスープが紹介されました。ネパールの「モモ」は、シュウマイのような形をした、スパイスの利いた蒸し餃子です。源流こそ中国の餃子ですが、チベット地方で独自の変化を経てネパールに入ってきたそうです。スリランカは、揚げ餃子の「パティス」。これもカレースパイスを利かせた独特の味わいです。形は餃子のように、その印象はパイにも似ています。

各国の餃子紹介の後、4カ国のグループに分かれて料理体

験が始まりました。皮づくりでは、留学生が手慣れた手つきで作業しながら、悪戦苦闘しているその他の参加者にアドバイスをしていました。具を作る作業では、日本人の「餃子」のイメージからはほど遠い、南アジアの香辛料やジャガイモ等の食材が登場。

スパイシーな餃子!?

参加者は皆、珍しそうに説明を聞いていました。その後も、具の包み方、加熱調理の方法等、料理ごとに特徴があり、参加者はみな仲良く協力しながら、料理を完成させていきました。

そして、待ちに待った試食会が始まりました。まずは、中国の「水餃子」。本場中国の水餃子は、日本の餃子に比べ皮が厚く、野菜や肉がたっぷりボリューム満点です。韓国の「マンドゥグック」は、鶏肉スープが食欲をそそりませず。ニンニクが利いており、とても体が温まります。ネパールの「モモ」は、スパイスが利いていますが日本人にも食べやすく、一度食べたら病みつきになる美味しさです。スリランカの「パティス」も、サクッとした食感と中に入ったジャガイモ、サバ、玉ねぎの味わいが新鮮で、箸が進みます。

参加者は、自分たちが協力して作った「餃子」を味わいながら楽しく歓談し、最後には、「一緒に餃子を作りながら交流ができて楽しかった。是非また参加したい。」という声が留学生、日本人の両方の参加者から寄せられました。

「人が交わる食べ物＝餃子」。

今回のふれあいフェスタは、餃子が留学生と日本人学生、地域の方々を包み込み繋げてくれたといってもいいのかもしれない。



ネパール「モモ」の作り方を実演する留学生

▶ 日本語弁論大会 Japanese Speech Contest for International Students

留学生が、日本語で発表する機会をもうけ、日本人学生との交流を深めるために、国際交流ボランティア愛好会が主催し、商学会と国際交流センターの協力により開催された本学初の取り組みです。



留学生が語る日本、そして故郷への思い

笑いアリ 涙アリ 感動アリ

10月18日（土）、N201 番教室において「留学生による日本語弁論大会」が開催されました。

本学初の日本語弁論大会に参加した留学生は9人。

留学生の目から見た日本の文化、日本人の印象、そしてそれぞれの体験から学んだことを発表してもらいました。

それぞれの思いを、流暢な日本語で語る留学生の姿に、参加者は釘付け！

今回は、秋に落ち葉が舞う美しい情景と重なり合う祖父への思いを表現した中国天津市出身、劉 亜東さんによる発表を紹介します。

金 延律（大韓民国 / 商学部第一部商学科）
「私の高校野球の思い出」

毛 健（中国 / 国際文化学部）
「日本初体験 - 細かい所に重視する日本人」

劉 亜東（中国 / 商学部第一部観光産業学科）
「落ち葉で感じたこと」

ヒマット ジャヤスリヤ（スリランカ / 工学部電気工学科）
「日本とスリランカの文化の違いと異文化の違いで学んだこと」

カマル プラサド ガウタム（ネパール / 経済学部経済学科）
「ネパールは寒いか暑いか？」

張 鋭（中国 / 国際文化学部臨床心理学科）
「裁判所の見聞」

タルチャバデル プージャ（ネパール / 経営学部国際経営学科）
「私の目で見た日本」

房 笑熹（大韓民国 / 商学部）
「日本の大学生活」

包 明霞（中国 / 経営学部産業経営学科）
「私の故郷内モンゴル」



日本語弁論大会発表者の9人



留学生と国際交流ボランティア愛好会、商学会のみなさん

落ち葉で感じたこと

Fallen Leaves remind me of my grandfathers.

劉 亜東さん

(中国 / 商学部第一部観光産業学科)



時間は水のように流れ、また秋を連れてきました。

もうすぐ23歳の誕生日を迎える私は、成長していくにつれ、過去のことを思い出すようになりました。

それは、日本に来て最初の思い出です。来日して初めて住んでいた寮を一步出ると、一本の木がありました。いつの間にか、季節が過ぎ去り、青々としていた若葉もすっかり葉も落ちてしまい、寂しいと感じました。その木のそばを時々、表情もなく、ロボットのような歩き方で、散歩する老人を見かけるようになりました。あの老人と小さな道、そしてあの木を見るのは、いつもの見慣れた風景でした。今も秋になるたびに映画のワンシーンのように思い浮かびます。

私には、祖父が二人います。

ふたりともクールな祖父で、誰にでもやさしくて、純粋で真っ直ぐな祖父です。落ち葉がちらちらと舞い散る季節になり、そのシーンを思い浮かべるころには、きまって故郷にいる二人の祖父を思い出して、わたしは「今何をしているだろうか」と、思うのです。

日本で、元気に働いているおじいさんやおばあさん達を見かけるたびに、国にいる二人の祖父のことが思い出され、「元気に暮らしているだろうか」と思います。

ある日、大学の友達と幼いころの話をしました。その時も、いろいろなことが頭をよぎりました。冬になると、やさしいおじいさんが買ってくれる暖かいおやつや、週に一度、もらえるお小遣いが楽しみで、二人のおじいさんの家を行ったりしたこと。また、おじいさんが作ってくれた、決しておいしいとは言えない料理も、そのほかの温かさが身にしみていたこと。今は懐かしむことしか出来ないようになりました。

また、いつも何も言わずに、静かにタバコを吸っている祖父の様子や、「今ではもう73歳になって、一人でいるのが怖い。」と言っていた、もう一人の祖父のことなど……。友達とは、「年寄りにはわからないね」と笑い話にしながら、どこか心の中ではさびしくなっていました。今、わたしは祖父たちと離れて暮らしているさびしさ……。

考えてみれば私の癖も、祖父と関係があります。小さい時、私は祖父の耳を触りながら、眠ってしまったことがよくありました。今も知らず知らずのうちに自分の耳を触ることが、私の癖になっています。振り返ってみると、幼いころの思い出の主人公は全部、祖父たちでした。

ふと今でも、「おじいさんは毎日楽しく過ごしているだろうか」と思います。ふるさとの父や友達に電話をかけることが多いのですが、二人の祖父のことが心配で、たまに電話をかけることがあります。しかし、心の中では心配していても、電話での会話が苦手です。なぜなら、相手が二人の祖父であれば、いつも同じ会話になってしまうからです。祖父たちは、「暑い?夏は暑さに気をつけてね」「寒い?冬だから、風引かないようにね」「今度いつ帰る?ちゃんと勉強して、体に気をつけて、ちゃんと食べてね」と、毎回同じことを言います。そんなこと見てもらえれば、今の私の元気な様子がわかるのに……と思うのです。思っているけれど、うまくいえません。

今年もまた、落ち葉が舞い散る秋になり、その落ち葉のことを見ていて、おじいさん達が落葉じゃないか、と私の中で落ち葉と祖父たちが重なって感じられるようになりました。落葉は風車と同じ、風に吹かれた風車は、よくまわっても、最後に静止します。木に満ちている黄金の葉っぱは、いずれは落ちて、地上の世界のものになってしまいます。しかし、葉は大地に落ちて、春の土となり、新しい花の季節を待っています。そんなことを考えさせられるようになってきました。両親の髪が白髪に変わり始めたことも気になりますが、祖父の真っ白になった髪を、気にしたことがあったでしょうか。そう考えるようになると自分自身に、「祖父への当たり前の挨拶が苦手だから避けているだけでいいの?」と自問するようになり、私が元気であることを素直に伝えるだけでいいんだと思うようになりました。それからは、二人の祖父にしばしば電話をかけるようになりました。

これまでは、「私はちゃんと頑張っているよ」と言えなかったのですが、今では言えるようになりました。また、「今までの4年間、大学生として、留学生として、日本での体験は神様からの贈り物だと思いつつ、何か苦しいことがあっても、難しいことがあっても、贈り物をいただいたという感謝する気持ちで元気で暮らしている」と、祖父達に伝えていきます。

二人の祖父を喜ばせて安心させるのは何も特別なことをすることはない、とても簡単なことだと気がつきました。話をするだけでいいのです。繰り返し同じ話でも、話をするだけでいいとわかりました。すべてが思い出になった後で、するべき孝行をしなかったのを後悔したくない。冬が来て、秋の落葉の美しさを見逃したくないように……。

少しでも、成長した今の私の様子を二人の祖父に知ってほしい。

今からでもいい孫になるように頑張りたいです。

そして、これからの一年間、楽しく、意義のある大学生活を送ってほしいと思います。



内モンゴルの民族衣装姿で参加した包明霞さん(左)と、筆者の劉亜東さん(右)

▶ 受入れ留学生体験記

Experience of Studying at KSU



今回は、釜山出身の朴孝正さんから福岡の印象と留学生活の様子についてお話を伺いました。

「釜山 VS 福岡」

…居心地の良さは変わらない！」

朴 孝正

(韓国 / 東亜大学校)

受入れ期間：平成20年9月
～平成21年2月

受入れ学部：国際文化学部



9月9日福岡到着！！

その時からもう5ヶ月と言う時間が経ち、帰国する日がだんだん近づいています。

まず、福岡の印象は“釜山とあまり変わらない”でした。港都市の釜山出身の私にとっては福岡と釜山は本当に似ている点が多いと思いました。一番似ていることは天気です。釜山の親との電話でよく天気の話がでますが釜山と福岡の天気はほぼ一緒でした。そしてどこに行っても簡単に海を見られることも福岡と釜山の共通点だと思います。釜山と似ている環境なので馴染みやすく、私は順調に福岡での留学生活を始めることができました。

また、大学での受け入れ体制がよく、問題なく留学生活を過ごすことができました。最初は、日本人の学生たちとともに授業を受けることについて不安があり、講義内容も聞き取れなくて大変なときもあったのですが、留学生だという点を配慮してくださったおかげで、だんだん慣れてきて楽しく授業を受けることができました。

私の福岡での留学の目標は漠然と聞こえるかもしれませんが韓国では出会えない様々な人々に会うこと、韓国では経験できない、留学するからこそできるいろいろな経験をしてみたいということでした。もちろん、日本に留学したからには日本語の上達は当然の目標でした。

留学生活を振り返ってみると本当にたくさんの縁があり、いい思い出をいっぱい作ることができました。何よりも嬉しかったことは、授業中に「留学生ですか」と話しかけてきて、わからないことを優しく教えてくれた友達、韓国にたくさん興味をもち共通の話題で盛り上がった友達、アルバイトをしながら仲良くなった友達、そして同じ留学生の友達など多くの友達に出会えたことでした。一緒に遊びに行ったり美味し

いものを食べに行ったりしながら、楽しく忘れられない良い思い出をたくさん作ることができました。

また留学生活で一番印象に残っていることは韓国語を教えるアルバイトをしたことです。大学で韓国語教師のアルバイトの情報をを見つけ、学外の学生を対象に韓国語の授業をすることになりました。それは思ってもみなかった経験でした。心配や不安もあり、緊張もたくさんしましたが回数を重ねるたびにだんだん慣れて教えることの楽しさを知りました。日本人の立場から見る韓国語がどうとらえられているかを知る新鮮な経験でした。機会があつたら韓国に帰ってもこの分野についてもっと深く勉強したいと思いました。

その他に、私が日本での生活で一番注目したことは「〇〇放題」サービスでした。例えば食べ放題、飲み放題、遊び放題、乗り放題などは本当に私にとっては何でも思いっきり楽しめるサービスでした。

「知れば知るほどよく見える」という言葉があるように、福岡での新しい環境に適応していくにつれて、以前気づかなかったたくさんの部分が見えるようになりました。にもかかわらずまだ無知な部分も多いと思います。福岡での留学生活はこれで終わりですが、またこれから新しい始まりがあると楽しみです。

今回の九州産業大学での留学生活は私にとってもう一歩前進するいい機会になったと思います。

半年間ありがとうございました。



九州国立博物館（太宰府市）にて

「カロリーヌ・バゴ展」

—Chiyofuku, second movement? exhibition inhabitance?—

芸術学部デザイン学科：黒岩 俊哉 准教授

受入れ学生：カロリーヌ バゴ

(フランス/ホルドー美術学校¹)

受入れ期間：平成20年9月～平成20年12月

今回私が担当した Caroline Bagot は、3ヵ月の滞在中、専門であるメディア・インスタレーションの制作を行った。彼女自身、彫刻や、ビデオ、写真などを学び、作品の中にそれらを総合していくというスタイルのアーティストだ。また、舞踏という日本独特のパフォーマンス・アートにも強く関心を持っていて²、伝統的な範疇にとらわれない、身体と空間をテーマとした作品を目指していた。今回幸運にも展覧会という形で、12月13日と14日の2日間、アートスペース千代福³にて個展が開催された。

会場は、無数のドローイングやコピー用紙の紙片、拾われた廃材や土、コンクリートブロックなどで埋め尽くされていた。上にのぼる階段の先には、2ヵ月半かけて撮影・編集された日本の映像が、サイズの違ういくつかのモニターやスクリーンに映し出されている。そして会場の最も奥には、紙の垂れ幕が幾重にもつり下げられていて、彼女のパフォーマンスとともに、新たに作品が描かれていくのであった。

天井や壁や床に配置された彼女のドローイング、および意図的に積み上げられた廃材には、彼女なりの強いメッセージがこめられている。それは、彼女自身の記憶—幼少の頃より書き留めてきたノート—による彼女自身の存在意義である。記憶と現実の間を行き来しながら、揺れ動く私たちのほかなさは、捨てられるものとしてのマテリアル(素材)への希求や、それ自体が記憶であるだろう映像のメディア的特性にあらわれている。

これらは、もとは酒蔵であった千代福の、暗くしっとりとした雰囲気と、その役割を終え朽ちていく建物の哀愁と妙に合致しながら、常に現在を問い続けていくのだ。

カロリーヌは日本人と比べても、背丈が低く華奢に見え、常に質素で自炊が中心であった。小さなデイ・バッグひとつで空港に降り立った姿は、出迎えた私たちを驚かせた。数日後、服を安く買えたと喜び、それが彼女の小さな顔に映えるのだった。

時には思い通りにならない悔しさから涙を見せるなど、周りを動揺させたこともあったが、表現することと作品を作り上げることに対しては、きわめて頑固でどん欲であった。ゼミ生たちも、そのような姿を見るたびに脱帽するしかなかった。

彼女は展覧会の準備のために、1週間ほど前から千代福の

ドイツ・フランスの大学等へ芸術学部の学生を派遣し、また受け入れを行っています。今回は、黒岩准教授が指導したフランスからの受入れ学生について感想をいただきました。

メンバー宅に泊まり込み、借りた自転車でひとり会場に向かった。筑紫野の朝夕特に冷え込む中、気になる廃材を見つけると、重いペダルを踏みながら何度も会場を往復した。それでも100円ショップで手に入れたという、レインコートを羽織りながら、ペンキや泥にまみれていた姿がかいがかいしかった。出発の日には、「フランスにはこんなおいしいものはない」と博多銘菓「博多通りもん」をお土産に買っていた。

日本に留学をする学生には、いろいろな理由や動機があるだろう。ただ、今回のカロリーヌのように純粋で一途な姿は、是非ともほかの留学生にもみてもらいたい。もちろん日本の学生にもである。

展覧会の終わった直後、すぐに彼女はその感想を求めてきた。たぶんいくつもの日本の思い出とともに、その記憶を次の作品として、それをつなぎ止めようとしていたのだろう。この現代芸術作品のアイデアは、ダンスをする時のような、はかない時間や動作から思いついたものだ。いくつかのたとえばたい素材から始まり、それ自身が、広がり、拡張し続ける。今、私は、エキシビションの誕生を感じている。

1.1878年設立のホルドー市立の伝統校。各国からの留学生が多い。美術(絵画、デッサン、彫刻、版画、写真、ビデオ)、デザイン、コミュニケーションおよびグラフィックアーツなどの多彩な分野で構成されている

2 舞踏家・原田伸雄氏には自身の舞踏とともに、いくつもの刺激をいただいた

3「アートスペース千代福」は旧千代福酒蔵を改装した現代美術のギャラリー。福岡県久留米市の南西に位置する。福岡を拠点に活動する数人の現代アーティストらによって共同運営されている。http://www.chiyofuku.jp/index.html

カロリーヌ バゴさんより



知らない土地での生活に戸惑い、母国の文化と日本の文化に大きなギャップを感じながら過ごした日々。しかし、実はそこから多くのことを学び、留学を終えた今、大変貴重な経験をしたと実感しています。制作活動に専念でき、千代福で個展を開くことができたのは、多くの人々の支えがあったからです。写真を撮っておらず、形に残る思い出はありませんが、記憶の中にしっかりと残っています。もてなしの心、控えめで謙虚な気持ち、人との繋がりを大切にする日本人の姿に、日本の文化を垣間見たような気がしています。ありがとうございました。

▶平成 20 年度国際交流の歩み

The Chronicle of KSU International Exchange in 2008

交流協定締結校との間で定期交流が実施され、学生・教職員の受入れ・派遣により、友好の絆がますます深まっています。また、交流協定の枠にとらわれず、異文化交流体験を目的としたアメリカの学生研修訪問団の受入れも行っています。



受入れ

▶カリフォルニア州立大学、サイプレス大学（アメリカ）との異文化交流

日程：平成 20 年 5 月 30 日（金）～7 月 1 日（火）

受入れ：学生 16 人、教員 2 人

受入れ教員： 高橋 真理枝 教授
樋口 夏代 講師

▶蔚山大学校デザイン大学（韓国）との定期交流

日程：平成 20 年 7 月 20 日（日）～7 月 29 日（火）

受入れ：学生 40 人、教職員 3 人

受入れ教職員： 金 世元 学長
金 聖福 教授
李 潤姫 助教

▶忠南大学校経商大学（韓国）との定期交流

日程：平成 20 年 6 月 27 日（金）～7 月 1 日（火）

受入れ：学生 25 人、教職員 4 人

受入れ教職員： JEONG YONG-GIL 学長
LEE KI-HOON 所長
JEONG JAE-HYUN 行政室長
CHOI SE-YEON 先生

▶東西大学校デジタルデザイン学部（韓国）との定期交流

日程：平成 20 年 7 月 22 日（火）～7 月 26 日（土）

受入れ：学生 39 人、教員 3 人

受入れ教員： 金 東賢 教授
朴 常炫 教授
金 亨優 教授

派遣

▶蔚山大学校デザイン大学・東西大学校デジタルデザイン学部（韓国）との学生・教員交流

日程：平成 20 年 9 月 1 日（月）～9 月 6 日（土）

派遣：学生 24 人、芸術学部教員 2 人

派遣教員： 古本 元治 教授
井上 貢一 准教授

▶忠南大学校経商大学（韓国）との学生・教員交流

日程：平成 20 年 10 月 31 日（金）～11 月 3 日（月）

派遣：学生 21 人、商学部第一部教員 2 人

派遣教員： 柄内 一郎 教授
郭 智雄 准教授

▶天津大学（中国）との学術交流

日程：平成 21 年 3 月 18 日（水）～3 月 22 日（日）

派遣：工学部教員 2 人

派遣教員： 藤崎 渉 教授
丘 華 教授



東西大学校デジタルデザイン学部の学生・教員受け入れ



忠南大学校経商大学との学生意見交換会

今号の表紙

JUNCTION とは 2001 年に国際交流センター報として発行された折りに多文化が合流しあうようにと命名されました。

今回の表紙は、平成 20 年度派遣留学生 田島紫苑さんが撮影したマンハッタン島とブルックリン地区を結ぶニューヨークの象徴のひとつ“ブルックリン橋”です。

発行／九州産業大学国際交流センター

〒 813-8503 福岡市東区松香台 2-3-1

TEL (092) 673-5588 FAX (092) 673-5611

掲載している職名及び学生の学年は平成 20 年度のものです。

編集・デザイン／芸術学部デザイン学科 永瀬 雪絵